

小樽商科大学英語 e-Learning 科目と、 英語 e-Learning 用独自教材開発について

横村(鶴木)栄美

0. はじめに

本論文では小樽商科大学英語 e-Learning 科目『英語 I D』『英語 II A 2/II B 2』の概要(使用ソフト, 学習の流れ, 学生の反応等)を述べ, そこで出た問題点を挙げながら, e-Learning 教材について論じる。効果的な e-Learning 教材とは何かを考え, 現在開発中の本学独自教材について紹介する。

1. 小樽商科大学英語 e-Learning 導入の経緯: LL 新設, カリキュラム変更(通年から半期科目への変更), ALC NetAcademy の導入, Newton 学習ソフトの導入, 教材開発プロジェクト

小樽商科大学では, 2005 年(平成 17 年)3 月に, 2 号館言語センター 5 階にある LL 教室を設備更新し, 従来の視聴覚機器に加え, コンピュータを導入して, 従来よりも AV 機器を充実させた「マルチメディア LL」を新設した。本学の語学科目において, CALL (Computer Assisted Language Learning) 授業といえる授業が始まったのはこの頃からである。当時はブレンディッド・ラーニング (Blended Learning) が主な授業形態で, 対面授業と e-Learning を合わせたものであった。たとえば, CD-ROM 付のテキスト教材を用いて, 学生が各自でその日のレッスンに該当する箇所を CD-ROM で確認し, 担当教員から配布された課題に取り組み, 課題の出来具合をペアで確認する。ビデオ教材を見ながら, パソコンで感想を書く。テーマに該当する作文を書くために, インターネットから情報収集をする, などである(当時

の学習の詳細については横村（2006）を参照）。

2005年（平成17年）には英語 e-Learning ソフト「ALC NetAcademy（以下、「アルク」）」を導入し、翌年の「ALC NetAcademy2」へのバージョンアップののち、ゼミや一部の英語科目で、ALC を利用した e-Learning が始まった。（横村（2009 a, 2009 b）この頃のアルクは補助教材としての利用が主で、あまり使用頻度は多くなかった。

その後、語学科目の半期化、全学的な TOEIC の導入についての議論があった。現在、進学や就職の際に、TOEIC スコアを要求されるが増えてきている。就職、進学時に必要となる TOEIC スコア取得を、1 年次から目標を持って学習できるよう、1 年生の授業で TOEIC に関する授業を提供することとなった。これまでの『英語 I A』『英語 I B』（各通年 2 単位）を、『英語 I A』『英語 I B』『英語 I C』『英語 I D』の 4 科目に変更した。『英語 I D』はその中で、TOEIC 全般に関する学習を e-learning で行うクラスである。

表 1 2008 年（平成 20 年）度以降の 1 年生英語科目

英語 I A	Reading	必修科目 各半期 1 単位
英語 I B	Oral Communication	
英語 I C	Electives	
英語 I D	e-Learning	

TOEIC に関連した教育を行うに伴い、本学は 2008 年から TOEIC の賛助会員となった。2008 年度から毎年度 2 回、7 月と 1 月に、TOEIC IP Test を実施している。受験者は『英語 I D』の履修者を中心に、毎回、300 人前後であり、自発的に、そして定期的に受験する学生も増えてきている。

2009 年度から、2 年生科目も半期化し、従来の『英語 II A 1/II A 2』（通年各 1 単位）『英語 II B』（通年 2 単位）から、『英語 II A 1/II B 1』『英語 II A 2/II B 2』『英語 II A 3』『英語 II A 4』の 4 科目に変更した。

表 2 2009 年（平成 21 年）度以降の 2 年生英語科目

英語ⅡA 1/ⅡB 1	英語ⅡA コースを選択した学生はⅡA 1, ⅡA 2 を選択 英語ⅡB コースを選択した学生はⅡB 1, ⅡB 2 を選択 各 1 単位
英語ⅡA 2/ⅡB 2 (e-Learning)	
英語ⅡA 3	英語ⅡA コースを選択した学生のみ履修 各 1 単位
英語ⅡA 4	

e-Learning 科目『英語ⅡA 2/ⅡB 2』では、1 年時に学習した TOEIC の知識をさらに深める学習として位置づけ、TOEIC 用学習教材である「Newton TLT ソフト TOEIC B コース（以下、「ニュートン）」を導入した。このソフトには、TOEIC 500 点程度のスコア取得を目指す「A コース」があるが、すでに 1 年次に 400 点以上のスコア取得を課していることから、B コースの導入を決定した。また、学生が個々のペースで学習するにあたり、相当数の問題量があること、種類が豊富であること、間違えた問題の繰り返し学習が課されていること、付属の模擬試験を定期的に行えることなどからも、本ソフトの導入を決定した。

ニュートンの導入と同時に、これまで議論してきた e-Learning 教材について、本学独自の教材開発を行うこととし、Newton 社との共同開発を進めることとなった。それ以前に、ALC 社の「モバイルアカデミー」で独自教材を作成し、ビジネス用英単語の学習用教材を期間限定で配信していた。「モバイルアカデミー」では、短文が表示され、3 択の適語選択式の問題が 1 日 3 問ずつ、登録した学生の携帯電話に配信された。期間は試験的であったため、夏休み中の 60 日間と、春休みから 4 月までの 90 日間であった。期間限定で、携帯電話のみのアクセスであったことから、広く周知をしたにもかかわらず、学生の利用は少なく、授業での導入もできなかった。しかし、利用した学生の感想は概ね良好であり、パソコンや携帯電話を利用した英語学習については、学生は肯定的にとらえているようであった。

2. 授業について：英語 I D (平成 20 年度より), 英語 IIA 2/ IIB 2 (平成 21 年度より)

2.1 『英語 I D』について

2008 年度 (平成 20 年度) より, 自学自習型 e-Learning 科目『英語 I D』を開講した。半期 1 単位の科目で, 定員 100 名のクラスを半期 4 クラス, 前期後期あわせて 8 クラスを用意した。教材はアルク教育社の「ALC NetAcademy2 (以下, 「アルク」)」である。アルクにはリスニング, リーディング各 80 ユニット, TOEIC 演習 20 ユニット, 単語学習ができる「道場」が収録されている。その他に, 教員が作成する「テスト (穴埋めテスト)」がある。学生は最初に「レベル診断テスト」を行い, そこで示されたレベルに応じ, 以降は各自で学習する課題 (ユニット) を決定し, 進める。月ごとに, 進めるべき課題の数をアルク内の「お知らせ」で示した。TOEIC のスコアで 400 点以上を取れば「可」以上の成績となり, これに, 通常の学習状況を加えて, 最終評価となる。前期は 7 月, 後期は 1 月の TOEIC IP Test を受験しなければならない。ただし, 過去 2 年間に受験した TOEIC スコアを提出することが可能であり, その場合は, そのスコアで成績評価が行われる。

表 3 平成 21 年度『英語 I D』履修者数

前期	E171D(火曜 4)	E172D(火曜 5)	E173D(木曜 4)	E174D(木曜 5)
	77 名	70 名	39 名	70 名
後期	E176D(火曜 4)	E177D(火曜 5)	E178D(木曜 4)	E179D(木曜 5)
	75 名	74 名	78 名	46 名
再履修	E175D(前期)	E180D(後期)	※再履修クラスは, 2 年生以上で通常の英語 I D の単位が「不可」の学生のみ, 履修ができる。	
	50 名	16 名		

表 4 『英語 I D』成績評価基準

TOEIC による『英語 I D』成績評価基準			
600 点以上	550 点～595 点	500 点～545 点	400 点～495 点
秀 (95 点)	優 (85 点)	良 (75 点)	可 (65 点)

※ TOEIC スコアに加えて、通常の学習状況の成績を評価基準に加えている。

「ALC NetAcademy2」概要

はじめに「レベル診断テスト」でテストを受けて、レベルを判定する。

表 5 「ALC NetAcademy 2」スタンダードコース ユニット数

レベル	リスニングコース	リーディングコース	TOEIC 演習
★-★★★★★			
★	9 ユニット	7 ユニット	20 ユニット
★★	18 ユニット	11 ユニット	
★★★	20 ユニット	27 ユニット	
★★★★	20 ユニット	26 ユニット	
★★★★★	13 ユニット	9 ユニット	
合計	80 ユニット	80 ユニット	20 ユニット

表 6 各コースの学習内容

<ul style="list-style-type: none"> ・リスニングコース・リーディングコース 1. First listening (リーディングコースは First reading) 2. Quiz-3 questions 3. Discovery (英語テキスト, 日本語訳, キーワードの確認) 4. Speed listening practice of the passage 5. Review <p>これに加えて、各ユニットに、教員側で作成する「テスト (穴埋めテスト)」がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・TOEIC 演習: 25-30 分, リスニング, リーディング各 20 問 計 40 問
--

学生は、パソコンの使用にある程度は慣れているため、学期の始めに学習の仕方を説明すれば、その後は各自で進めることができていた。2008年度は、教室のパソコン台数に合わせてクラスサイズを決定したこと、履修者が一定の時間に偏ってしまったこと、また、学習の仕方に慣れたら、授業時間外にも学習してよい（これは「授業時間に必ずしも出席しなくてよい」と学生に解釈されてしまった）ことなどから、TAを置いてはいたものの、TAの仕事は主にトラブル対応程度のものであった。また、学生の課題の進度が予想していたよりも早かったことや、特に学期中の小テストや進捗状況の確認（面談）などがなかったため、学生の学習動機はあまり強くなかったように思う。

TOEICで400点を取らなければ単位が取れないとはいえ、「e-Learning＝楽に単位が取れる」という認識を与えてしまったようだ。

この反省をふまえ、2009年度の授業では、授業中に学習の進み具合を確認する出席表を配布した。学生が記入し、授業の終わりに提出したものを、こちらで出席と学習状況を確認し、コメントを書いて、次の授業で返却することを繰り返した。また、中間期にTOEICのハーフテスト程度の小テストを行い、成績に加えた。また、月ごとの学習量を課題として示したので、学習内容が決められたことで、学生は2008年度の授業よりも厳しさを感じつつ、まじめに取り組んでいたようだ。

『英語 I D』の現在の問題点は、「TOEICスコアで400点以上取ること」が成績評価の基準になっているため、授業に出なくても、400点を取ってくると、単位を出さなくてはならないことである。過去に400点を取っていると、学習動機がなく、授業での学習が内的動機付けに大きく影響されてしまう。現在、授業ではアルクしか使用していないので、内容を考慮すると、学習教材として十分とは言えない。リスニング、リーディングとも、各ユニットには3問程度の問題しか用意されておらず、教員が作成するテスト（穴埋め）を進めても、それだけで十分な内容理解にはつながらない。ユニットとテストが別の画面に示されているため、テストをし忘れる学生が多くいた。TOEIC演習は、実際のTOEICテストの出題の仕方ですべて1ユニット40問あり、

内容（進め方）を理解するには役に立つ。しかし、40 問のテストの後に本試験換算点が示されるが、問題数が少ないため、あまり参考にできない。また、本学ではアルクは学外アクセスを許可していないため、大学外での学習ができず、授業時間以外でも、家などで、やりたいと思った時に学習できないということもあったようだ。

2.2 『英語ⅡA 2/ⅡB 2』について

2009 年度（平成 21 年度）より、2 年生を対象とする英語科目も全て半期科目となった。『英語ⅡA 2/ⅡB 2』は半期 1 単位の e-Learning クラスである。使用教材は Newton 社の「Newton TLT ソフト TOEIC B コース（以下、「ニュートン）」である。この学習ソフトは 7 つのパート、さらに 50 のサブコースに分かれて学習プログラムが生まれ、全部で 18,764 問が収録されている。ブラウザ（インターネット）対応のため、学外にいても、インターネット環境があれば、自宅からの学習が可能である。授業では、50 のサブコースのうち、7 つ以上を終えるように目標を設定し、毎週の進捗状況を確認した。終了したコース数（コース終了毎に表示される「習熟証明番号」の取得数）を、授業用のホームページに掲載している。また、月に 1 回、小テストとして、ソフトに付属している「模擬試験」を課した。

表 7 平成 21 年度『英語ⅡA 2/ⅡB 2』履修者数

前期	E221A2/BB2(水曜 3)	E222A2/BB2(水曜 4)	E223A2/BB2(水曜 5)
	85 名	94 名	95 名
後期	E224A2/BB2(水曜 3)	E225A2/BB2(水曜 4)	E226A2/BB2(水曜 5)
	88 名	94 名	95 名

表8 ニュートンの学習の進め方

学習の進め方

通常は1から3までを繰り返し、それが終わったら4と5を進める。

1. 自分のID, パスワードでログインする。
2. 学習コースを選択 (TOEIC の Part に対応する7コースがあり, 合計で18,764問を収録) する。
3. Step ごとに「A」から学習を開始→学習が終了すると「A終」マークが表示される。全問正解の場合は, ステップ番号の上に「合格」マークが表示される。学習したブロックは緑色から水色に変わる。
4. 全ての Step の学習を終了し, 再度Bから学習を開始して「A終」マークを「合格」マークにかえる。全問正解の場合は, ステップ番号の上に「合格」マークが表示される。「C」では, 「B」で間違えた問題を学習する。
5. 「ニガテ1」「ニガテ2」を学習→すべてのブロックが水色になり, 「習熟証明番号」が発行される。

『英語ID』でのアルクと違い, ニュートンは問題数, 学習量とも多く, また, 細かく学習についての指示を出したので, 学生は「e-Learning=楽しんでもいいかもしれない」という認識が変わったようである。特に, 月に1回の小テストは, 3週学習したら1回小テストという流れになり, 学習意欲の維持につながったように思う。

評価は, 英語の苦手な学生も, 出席して学習すれば「可」以上の成績が取れるよう, 出席, 学習状況(習熟証明番号取得数), 学習時間, 小テスト, 定期試験を考慮し, 最終評価とした。

履修する学生は1年次に『英語ID』でe-Learningについての学習の仕方を学んだので, 操作等に特に問題はなかった。

ニュートンは, 問題が大量にあること, 繰り返し学習が可能なこと, 様々なレベル, 種類の問題があることから, この教材の導入を決定した。また, 導入と同時に独自教材の開発を進めることとした。

2.3 学生の反応：アンケート調査結果から

前期の終わりに、授業の履修者に授業についてのアンケート調査を行い、e-Learning について、意見を記入させた。アンケート内容は、主に「英語全般：自分にとっての英語の重要度、これまで受験した資格試験とそのスコア(級)、英語を学習する理由」「アルクソフト／ニュートンソフトについての学習の有効度、問題の適切さ」「チーム・ティーチングについて」である。今の学生は、ゲーム、携帯電話、パソコンなどが充実しているため、電子機器の使用について抵抗をあまり感じていないようである。英語は苦手だけれど、パソコンで学習できることが面白いとか、座学の授業よりも良いといった意見が、回答に多く記入されていた。資格試験を受けるほどの英語の重要性は感じないが、パソコンによる学習は楽しかったという意見もあった。また、いつまでにどれくらいやらなくてはならないという、期限の設定があったのも、メリハリのある学習ができたようである。

不満点、問題点として多く挙げられていたのは、課題の量が多い(『英語II A 2/II B 2』)、出席をなくし、完全な自学自習にしてほしいという意見であった。課題については、特に2年生は、学生の能力に関係なく、課題量が満たされずに不可になった学生は2割弱で、課題が多いといいながらも、指示した課題量を終えた学生が8割近かった。授業時間内に終わる課題量にすべきという意見があったが、授業時間だけで終わる課題量では、早い学生ならば1週間程度で学習を終わってしまうだろう。英語が苦手な学生にとっては大変かもしれないが、最終的な学習状況を見る限り、今回の2年生の課題量は適切だと考えている。出席をとるのをやめて、完全な自学自習にしてほしいという意見については、カリキュラム上の問題もあるが、出席や課題の達成率を加えて評価を厳しくすることで、頑張らなければよい評価が取れないような仕組みにしている。出席も評価に加えると説明しており、好きにできるということは、やりたくないときはやらないということにもなり、ほとんどの学生が単位を取れなくなる可能性も出てくるだろう。

3. e-Learning とは何か

3.1 e-Learning の定義

ところで、唐突ではあるが、ここで、e-Learning について考える。そもそも e-Learning とは何だろうか。単純にパソコンで学習することではない。日本 e ラーニング コンソーシアム (<http://www.elc.or.jp/>) によると、e-Learning は以下のように定義されている。

e-Learning (e ラーニング)

パソコンとインターネットを中心とする IT 技術を活用した教育システムを e ラーニングと呼ぶ。米国をはじめとして世界各国で研究が行われていた CAI (Computer Aided Instruction=コンピュータの支援による教育) は、当初、教材を CD-ROM など配布する形体が主流だったが、配布コスト、配布後の内容修正の困難さ、学習進捗の一括管理の難しさなどの問題があった。

その後、インターネットの普及や企業内ネットワークの広がりによって、教材をインターネットで配信する「WBT」(Web Based Training) や、学習者のコンテンツ管理やスキル目標の設定、学習の進捗状況などを一元的に行う「LMS」(Learning Management System=学習管理システム) を使用したシステムが主流になってきた。

講師と学習者が教室に集まる集合教育は時間や場所が制約されるが、ネットワーク化の進展によって、コンピュータとネットワークさえあれば、そうした制約を受けず、いつでもどこでも学ぶことができるという大きなメリットを獲得した。

その他の e ラーニングのメリットとしては、以下の点がある。

- ・講師の質の違いに学習者が影響されない
- ・個々の学習進捗状況に合わせて、何度でも繰り返し学習ができる

- ・学習者の理解度に合ったきめ細かな学習の設定ができる
- ・最新の内容を早く、安価に配信できる
- ・多くの学習者に同一の教材を一律に提供することができる
- ・職場を離れずに学習できるので、集合研修より時間・間接コストの削減ができる

しかし、集合研修がすべて e ラーニングに置き換えられるわけではない。ブレンディッド・ラーニング（Blended Learning）と呼ばれる e ラーニングと集合研修を組み合わせた学習形態は、e ラーニング単独の場合より教育効果が高いという例が多く報告されている。e ラーニングに適した学習と適していない学習を見極めて、それに応じた学習の形態や方式を使い分けることが重要になる。また、e ラーニングは、特に企業で、教育ツールとしてだけでなく、ナレッジマネジメントやパフォーマンス・サポートのインフラとしても期待されている。

つまり、e-Learning は、「いつでも」「どこでも」できること、繰り返しの学習が可能であること、能力に応じた学習が可能であることなどが、利点として挙げられる。これまでの対面授業とは違い、時間での固定よりも、個人の学習量での評価、それに伴う能力の向上が優先される。

次に、e-Learning の教材について考える。これまで著者が e-Learning 科目を担当してきて、よい教材、授業に適した教材には、以下のポイントがあると考えている。

- 1 大量で
- 2 多レベルで
- 3 多種類で
- 4 小さな目標を設定できて
- 5 ごほうびのあるもの

6 対面授業との連携が取れるもの、他の学習につなげられるもの

現在 e-Learning 科目で使用している「アルク」と「ニュートン」を例に挙げながら、以下で順に説明する。

3.2 大量であること

e-Learning はインターネット接続がされているパソコン環境があれば、いつでもどこでもできるため、学習者は学習を自由に進めていくことができる。授業中だけでなく、自習することも考慮し、一定の期間で終わりきれないくらいの大量の問題量が必要となる。

アルクは、リスニング、リーディングともに 80 ユニット、TOEIC 演習 20 ユニットのほか、単語学習の「道場」(12 レベル 12,000 問、リスニング、リーディングコースの単語各 800 問)が収録されている。ただ、学習の仕方によっては、ただ聴いただけ、読んだだけという「学習しっぱなし」の状況になってしまう、残念ながら問題数が多いとはいえない。

ニュートンは、問題が TOEIC のパート別に対応しており、7つのコースの中にサブコースがあり、合計すると 2 万近い問題が収録されている。間違えると必ずあとから繰り返し学習が必要になるため、苦手を克服していくことができる。

表 9 各ソフトの教材量と特徴

	教材の量	特 徴
アルク	リスニング、リーディング各 80 ユニット (各ユニットに問題 3 問)、TOEIC 演習 20 ユニット、そのほか単語テスト (4 択) 13,600 問	リスニング、リーディングともにレベルに応じた学習が可能
ニュートン	合計で 18,764 問	TOEIC のパート別に問題を分類。各コースの中にサブコースがあり、問題の繰り返し学習が可能

3.3 多レベルであること

英語を苦手とする学生もいれば、得意とする学生も授業を受けるので、できるだけ、努力をしたのに単位を取れないで終わってしまうことのないように配慮する必要がある。苦手とする学生も、一定の量をこなせば力をつけることができるよう、難しすぎない程度で、継続できる程度のレベルの問題を用意する必要がある。英語が得意な学生には、さらに高いレベルが目指せるような問題を提供しなくてはならない。継続したのなら、すべての学生にとって、実力につながり、単位が取れるようにしないと、努力が泡になってしまう。たとえば100%学習を終えたのに、単位が「不可」になることは、実力的におかしいし、やれば成績があがると思えば、学生は自ら学習を進めるだろう。そのためには、難しすぎるわけでもなく、易しすぎるわけでもなく、一人一人にあったレベルの教材提供が必要となる。

アルクでは、最初にレベル診断テストを行うので、ここで出たレベルに応じて、自分の学習するユニットが選択可能である。

ニュートンは、自分のレベルを図ることはできないが、ある程度のレベルに分かれた単語学習ができたり、間違えた問題を繰り返し学習することが可能である。また、模擬試験を行うことで、自分の苦手や得意分野を知ることが可能である。

表 10 各ソフトのレベル分け

	レベル分け
アルク	レベル診断テストによって、自分のレベルを知ることができる。自分のレベルに合わせた学習内容が選択可能
ニュートン	レベルの選択はできないが、単語の学習はある程度のレベルわけがされている。実際の TOEIC のように、様々なレベルの問題がランダムに出題される

3.4 多種類であること

TOEIC 形式の問題を解くことを目標とした教材なので、少なくとも Part1

の写真描写問題から Part7 長文読解問題までの内容を含み、さらに TOEIC にはない、英作文なども取り入れた教材があるとよい。

アルクはリスニング、リーディング、単語と、自分のレベルに応じた TOEIC の大まかな学習が可能だが、それぞれのコースは同じ手順で進み、ユニットの中にクイズ程度の問題しかないため、さらに関連教材を提供しなくては、やりっぱなしになってしまう。TOEIC 演習は 1 ユニット 50 問しかないので、本試験で通用するだけの集中力をつけることは難しいだろう。

ニュートンは、問題数、サブコースともに十分な種類があるので、様々な学習の仕方が可能である。

パソコンを使っての学習は、最初は目新しく、学生は興味を持って進めていく。しかし、同じことの繰り返しでは飽きてしまう。問題の種類は多いほうが良い。

表 11 各ソフトの問題の種類

	問題の種類
アルク	リスニング、リーディングコースに分かれているものの、進め方(手順)は全て同じ
ニュートン	英-和、和-英の入力、ディクテーション、写真描写問題、適語選択問題など、問題の種類が豊富

3.5 小さな目標を設定できること

たとえば『英語IIA 2/IIB 2』では月に 1 回、ニュートンのソフトに入っている模擬試験を使って、小テストを行っている。通常の学習を 3 週行い、1 回テストをする流れなので、次のテストまでの目標を設定できる。また、今月中にこれだけやっておかないと、あとでまずい、今月中にこれだけの量を終えていないと単位が取れないという状況を作って、学生の尻を叩く効果もある。

アルクにはテスト機能がないので、別教材から TOEIC のハーフテストを用意し、テストをした。また、月ごとの課題量を設定し、学習を進めさせて

いる。

表 12 各ソフトの目標設定

	目標設定
アルク	月ごとの課題量を設定し、学期の終わりまでに各 25 ユニット（TOEIC 演習は 13 ユニット）以上終えるように指示。中間期に小テスト
ニュートン	学期の終わりまでに、7つのコースを終えること。ソフトに付属の模擬試験を月 1 回の小テストとして義務化

3.6 ごほうびがあること

ところで、なぜ任天堂 DS の「脳トレ」シリーズが人気なのだろうか。漢字検定や英検、TOEIC も、今では任天堂 DS で学習が可能である。

任天堂 DS のソフトなどでは、学習が一定量を超えると、追加のトレーニングができるようになったり、キャラクターが増えたり、桜の木の花が増えたりする。このような学習ソフトを購入する自体、その人の内的な学習動機付けはかなり強いのだが、ちょっとしたごほうびや変化があると、さらに学習が続けられる。授業でごほうびは難しいが、「単位を取る」という大きな目標があり、そのために学習を続ければ、いずれは自分の力となっていく。

アルクには「道場（単語テスト）」にランキング機能があり、ここで自分の順位を見ながら学習を進める学生が多かった。

ニュートンでは、学生の進み具合を授業のホームページに載せているので、これを見て、学習を進める目安をしている学生もいる。

表 13 各ソフトの内的動機付けを促すもの

	ごほうび（内的動機付けを促すもの）
アルク	単語テストのランキング機能
ニュートン	終了コースの数をホームページに掲載

3.7 対面授業との連携が取れるもの、他の学習につなげられること

e-Learning は万能でないので、全てをそれだけでまかなうことはできない。たとえば、学習者一人一人に合わせた解説や説明を、その学習者が納得し、理解するまで細かく用意することは難しい。個々のレベルに応じた学習教材を提供できたとしても、学習しっぱなしにならないような配慮が必要になる。定期的にテストなどをして、自分の得意な箇所や苦手な箇所を知ること、対面授業で苦手と感じることを e-Learning で学習することなど、e-Learning 以外の学習方法とつながれることが重要である。

アルクやニュートンを対面授業につなげる方法として、ユニットや個々の設問に対する解説をしたり、教員が独自にテストや追加問題などの、関連する教材を作成することが挙げられる。しかし、これでは、個々の学生のレベルに応じた指導をするのは難しいだろう。逆に、対面授業で行っている、リーディングや文法問題、会話などの学習で、学生が苦手と感じることを、e-Learning で学習することは、大きな効果をあげられるだろう。

現在、本学英語授業向けの独自教材を開発しているが、偶然にも、これらのポイントを踏まえたものになっている。共同開発している Newton 社の学習ソフトは、これらのポイントをおさえており、かなり理想的な学習環境が作れると考えている。

4. 英語 e-Learning 独自教材開発について

現在、Newton 社との共同研究で、独自教材の開発研究を行っている。

半期 15 週のうち、12 週分の問題が必要となり、1 年生で、1 週 1 回の授業で 60 から 70 近くの問題をすすめる計算で、問題を作成している。

本学の学生に合わせてというのは、ひとつは学生のレベルに合わせるという意味、もうひとつは場面ごとの英語表現の使い方、学生の得意不得意に合わせるという意味がある。学生のレベルに合わせるには、英語が不得意の

学生にも学習できるレベルの問題を用意し、一人でも学習を続けられるような内容を用意しなくてはならない。場面ごとの英語表現の使い方については、間違えた問題を何度も繰り返して解いたり、自分がどこが弱いのかを知ることのできるような問題を提供する必要がある。

教材の作成は、最初はとて大変である。まったくのゼロから作るわけだから、手間も時間もかかるのは当然である。しかし、e-Learning の良いところは、作成した教材の修正や、追加が随時可能なことであり、また、個々の学生の学習状況を確認できるので、学生個人の得意・不得意分野や、学年ごとの学生の傾向を見ることが可能である。学生の全体のレベルや傾向が変われば、新たな教材を増やし、提供することも容易にできる。

5. 終わりに

現在、本学独自教材の作成はかなり進んでおり、1年生から、自作教材の導入を行い、順次、2年生以上の学年のプログラムの開発を計画している。これと平行して、e-Learning と、TOEIC や検定試験などの相関をとる計画もしている。教材の修正と作成を続けながら、いずれは3年生まで対応できるだけの問題量を作成していく計画である。その後、教職課程や大学院、いずれは中学校や高校の教材としても対応できる教材を開発する予定である。

謝辞

本論文は2009年12月12日に行われた、第22回小樽商科大学教職研究会における講演原稿に加筆・修正をしたものである。本論文の執筆に当たり、e-Learning 教材開発プロジェクト担当教員を中心とした英語教員の皆様と、授業アシスタントの担当学生にお礼を申し上げます。

参考文献

- 横村栄美 (2006) 『CALL について(1)——機能の紹介と授業補助を通しての雑感——』小樽商科大学言語センター広報 Language Studies, 第 14 号, 55-59
- 横村(鶴木) 栄美 (2009 a) 『CALL について(2)——e-Learning ソフトの活用と自学自習型授業について——』小樽商科大学言語センター広報 Language Studies, 第 17 号, 33-36
- 横村 栄美, (2009 b) 『小樽商科大学 e-Learning の取り組み——ALC NetAcademy2 による自学自習と TOEIC, モバイルアカデミーについて——』英語教育と e-Learning, アルク教育社, 124-125

日本 e ラーニングコンソーシアム <http://www.elc.or.jp/>